



カリエロ CAGLIERO 11



150 感再 謝考 再発 進

198 2025年 6月

サレジオ会宣教ニュース

サレジオ会宣教部門による
サレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信

再発進



友人の皆さん、

共感、あわれみは、サレジオのミッションにおいては単なる理念ではありません。神との関係、私たちが仕える人々との関係を形づくる、生きた行動です。なぜなら私たちは、ドン・ボスコの生き方を通して「よき牧者」イエスに倣うよう呼ばれているからです。私たちは、深い同情、理解、思いやりをもって召命を生き抜きます。物的支援だけでなく、心の支援、霊的な支援を差し出しながら、より恵まれない人々、特に子ども・若者の側に立つよう、共感によって招かれているからです。

ドン・ボスコがそうしたように、一人ひとりの尊厳を大切に、いつくしみを全面的に自分のものとするようサレジオの霊性は私たちに教えます。私たちはこの使命への献身を新たにしながら、自分が遣わされている人々との関わりをどのように深めることができるか、振り返ります。言葉と行いのうちにいつくしみを表し、神の愛の道具となりますように、そして、共感、あわれみをもって、人々との関わりを生き抜くことができますように、為すことすべてのうちに神の愛を映しながら。

● 財務顧問室、会計担当
ホセ・ジョセフ神父, SDB

「出向いて行く」サレジオ家族であること



わずかひと月余り前、教皇フランシスコが私たちのもとを去りました - いつくしみと共感の教皇。教皇フランシスコの生き方、教え、司牧のスタイルは、共感が、弱々しい感傷でも一時的な感情でもないことを、私たちに思い起こさせます。それどころか、いつくしみと共感、三位一体の、そしてナザレのイエスのみ心の、本質的な特性なのです。それは、宣教する教会の生ける魂です。

教皇フランシスコによると、あわれみは、**教会の心から生まれる変容させる力**であり、教会の最も奥深いアイデンティティーを表現するものです。『福音の喜び』で、教皇は明確に述べています：

「わたしにとって民のただ中での福音宣教とは、生活の一部分でも、取り外せる装飾品でもなく、人生の中の付録でも、ちょっとした時間のことでもありません。それは、わたしという存在から、それこそ自己破壊を望むのでもなければ取り除くことのできないものです。」(使徒的勧告『福音の喜び』273) 遣わされている人々との関わりにおいて、共感といつくしみを生きる賜物を願い、祈るよう私たちに招く今月のサレジオの宣教の祈りの意向は、それが差し迫っているということに、再び目を向けさせます。それはただ単に、良いことをする、あるいは司牧の役目を果たす、ということにとどまりません。それは、**他者の痛みが自分の心に触れ、それに動かされ、形づくられ、変容させられるのを受け入れること**です。2015年の説教で教皇は述べています。「今日、教会は母、私たちの母です。教会は母であり、私たちと共に歩み、共に泣きます。……涙を流さない教会は、子どもたちの苦しみを見て痛みを感じない、冷たい教会です。泣かない教会は、母ではありえません。」この考察の流れを受けて、私たちは曇りのない明確さをもって言うことができます：**サレジオ修道会は、その管区、共同体、サレジオ会員、サレジオ家族のメンバーは、若者の痛みを感じないなら、若者と共に泣くことができないなら、自らを母、父、兄弟、友と呼ぶことはできない、と。実に、サレジオのミッションは、私たちの戦略的計画や機能的・司牧的プロジェクトから生まれるのではなく、ドン・ボスコの心のような、感じる心から生まれるのです。**キリストの愛に揺さぶられたドン・ボスコは、「ジェネララ」刑務所で涙を流しました。ドン・ボスコはその涙を具体的な行動へと変容させ、この世に置き去りにされた子どもたちが希望と笑顔を取り戻す家、学校、教会、遊び場として、サレジオのオラトリオを創設したのです。

今日、その同じ共感によって心を揺さぶられるよう、かつてないほどに、私たちは呼ばれています。それは、**すべての人に向けて大きく扉を開き、「人々のもとへ出向いて行く」サレジオ家族**となるよう、私たちに衝き動かします。教皇フランシスコは、「出て行ったことで……傷を負った教会のほう……閉じこもり、自分の安全地帯にしがみつくと気楽さゆえに病んだ教会よりも」(同49)好きでした。いつくしみと共感によって、私たちが、**温かな優しさ**と**正義の生ける存在**、キリストの心で泣き、愛し、行動できる、ドン・ボスコのスタイルを生きるまことの宣教者へと変えられますように。

● 新宣教顧問

ホルヘ=マリオ・クリサフツリ神父, SDB



ようこそ
ホルヘ神父



Cagliari 11 (カリエロ11)の全バックナンバー：<http://salesians.jp/library/cariero>

韓国：さまざまなニーズへのバランスある対応を、サレジオのまなざしで



ジュリーさん、今月、私たちは教皇フランシスコと共に、この世が共感において成長するよう祈ります。韓国のサレジオ宣教事務局は、このことにどのように貢献していますか？

私たちの使命に含まれていることの一つは、支援者の福音宣教を支えることです。世界各地の宣教の現場のニュースを伝えるよう努力し、祈りと愛のわざに参加するよう人々を招きます。支援者の共感が、憐憫ではなく、連帯の意識から深まるように、宣教の成長を伝える話に光を当てることを目指しています。私自身、さまざまな現場からの話を聞くのが大好きです。私が特別なのではなく、現場の声に直接触れることのできる恵まれた立場にあるのです。だからこそ、その話を有意義な形にまとめ、伝える責任があります。また、支援するプロジェクトの選定には十分に注意します。支援者の善意が、価値ある実を結ぶためです。

韓国では、多くの信徒が活発に活動していますね。例えば、サレジアニ・コオペラトリーや同窓生です。その信徒の人々とサレジオ会はどのように協力しているのですか？

緊急支援が必要なとき、サレジアニ・コオペラトリーはいつも最初の一步を踏み出してくれます。ウクライナの戦争やミャンマーの状況のような危機に当たって、コオペラトリーの皆さんは自分のことのように心から心配し、祈り、資金を集めてくれました。

ドン・ボスコ技術訓練校（現在は閉校）とサレジオの各高校の同窓生は、今や幅広い分野で活躍していますが、私たちに足りない専門性、そのほかの支援を提供してくれます。カトリックの人もそうでない人も、サレジオの先生たちと過ごした頃のことを、皆、懐かしそうに話します。まるで一時、若者に返ったかのような様子でよく当時は振り返ります。私たちは2027年のワールドユースデーを準備しながら、SYMの若者にリーダーシップの機会を提供し、より積極的な参加を促しています。

ジュリーさん、仕事で最近、いちばんうれしかったこと（誇りに思ったこと）は何ですか？

私は仕事で直接若者と接することがなく、数字や企画に毎日かかりきりになりがちです。そのため、仕事のなかで、サレジオのものの考え方やより幅広い視野を保つよう努力しています。宣教地と支援者、それぞれのニーズのバランスを取るのが難しいこともありますが、同じ使命を共有する仕事の仲間存在に勇気づけられます。

昨年、私は南スーダンを訪れました。それまで事前の連絡を通してしか知らなかった現地のサレジオ会員と行動を共にしました。ある日、その土地の状況を十分に理解しようとする私の努力を見ていた彼は、「ジュリーは大きな人だね」と言いました。短いひと言でしたが、心に残りました。



キム・イェウン(ジュリー)

私は韓国の原州市に生まれました。ソウルの延世大学の哲学科を卒業しました。大学生のころ、教会でカテキズムを教えるボランティアをしました。

2016年のクラクフのワールドユースデーで初めてサレジオ会と出会い、2021年から、サレジオ宣教事務局で働いています。国際支援プロジェクト、資金調達、ソーシャルメディアのアカウントを管理しています。同時に、SYMに積極的にに関わり、ダンスのボランティアや、リスボンのワールドユースデーでは若者の使徒職に参加しました。

<https://www.youtube.com/watch?v=zqk92V1tpKw>



サレジオの宣教のための連帯

フ
ォ
ー
ラ
ム

第174回配付(2024年中間期)
プロジェクト支援の総額
9百万ユーロ

第175回配付(2024年末)
プロジェクト支援の総額
9百50万ユーロ

2024年のプロジェクトへの
最大の支援団体

- Misiones Salesianas Madrid
- Missioni Don Bosco Torino
- Salesian Missions New Rochelle
- Salesian Mission Office Seul

6月 サレジオ 宣教の 祈りの意向

再発進 > 共感

サレジオ会の意向

私たちが遣わされて出会う人々に関わる中で、共感とあわれみを生きることができるよう祈りましょう。

教皇フランシスコの祈りの意向 > 世界が、よりあわれみ深いものとなりますように



宣教の連帯のために
共に働く人々